

雨脚が強まるその下には一人の少年が身体を濡らし続けていた。その森の中をよく見つめているその視覚の先には、星がいくつも空から次々と刺さっていった。少年は青年になつていて、雨で身体を洗いながら、その人をじっと見据えていた。

——笑うんだよ？ 絶対に。

青年に過つた昔の言葉は、彼の表情に笑みを零した。星空を見据える確かな瞳はいつまでも、輝くことを宿命づけられたのかもしれない。そんなことを思つた青年は、樹々に隠れて刺さりこむ、陽射しが手に蓄えられていた。気付けば、もう雨は止んでいた。

「お前も、大変だな。きつともう一匹もいるだろうしな」

青年は笑つて、虎の頭を撫でて、何かを見つめながら、遠い記憶を思い出す。でも、その言葉自体もあまり意味の成さないものになりかけていた、と青年は気付いている。その言葉を想うと心が痛む。それは喻えようのない痛みだった。

——笑わないと、貴女は幸せになれないんだよ？ なのにどうして……。

フラッシュバックする言葉と想いが琴線に触れて、どちらとも後悔の念を示しだし、空に向けた瞳はただ、濡れていた。

「きつと、あいつはどつかで暮らしているんだろうな」

青年の服を調達した誰かは今でも星屑に想いを馳せているのだろうか。

でも、それでもいいと、青年は無理に表情を作る、けど……。

この光景を見つめている私にどうしろというのだろう。青年に見つけてほしいと思うしかないのだろうか。

わからない。夜空を眺めながらこうやって、この光景を見つめているのは心か、それとも私か。

ずっと、こうしていればいい、そんなことを思つて。

そつと触れた頬に流れた何かは光に照らされて、妖しく光つていった――。

「おい！ 今日ダメじゃねえか！」

「す、すみません。今からでも」

「もう、遅えよ。しつかりした元を持つてる先輩に謝るのはまだ早いからな」

「……はい。今日はもう帰ります」

憤慨している先輩はまた、私が造つたそれを見遣りながら考え始めた。そしてそれを見ながら違う先輩に肩に手を置かれる。

「そうしてくれ。先輩はまだ気づいてないようだから。俺が何とか言つておく。その代わり」

「その代わり、ですか？」

「やめないでくれよ？ お前が一番頼りになっているのは事実なんだから」

「……はい！」

「じゃあな」

手を振ってくれた先輩の背中を見ながら、私が思い出に逃げ込んでいる頃、雨が優しく光を浴びながら私を照らしていた。心が蔷薇色に染まっていくのは疑いようのない事実なのかもしれないと想うと、それを上から照らしている少女が眩しく輝いた。いや、色んな意味でね。

階段を上っていくと、どうやら屋上からホースを使って、グラウンドに流水を吹っ掛けている、そのことを私は面白おかしく眺めていた。

「姉さんはいつも怒られてるね。でも、恋はもう叶わないって思っても現実を見た人の感想としては正解なんじゃないかなあつて思うのは気のせいかな」

「気のせいよ。それより、雨みたいに勘違いしたこの濡れた服をどうにかしてほしいのよ」

「ははっ！ 私の服と交換しろっても？」

「嘘よ。でも、場面作りに雨に打たれている女って結構リビドーを感じるんだけどな。まあいや。帰る？」

「帰りましょ。私も早く、卒業して仕事というものに触れてみたいわ」

「同感でございます。にしても、なんで先輩もこんなにも厳しいんかね。姉さんだけに厳しいって。好きなんかね」

「好きだったとしても必ず断るって知っている先輩なのにね」

「そうだね。だって、姉さんの」

あつ、と申し訳なきようにそれを止める妹に私は優しく微笑む。いつも言っているけど、妹も妹なりに私を励ましていたんだから、少しぐらいは赦しているんだよ。

「良いわよ。気にしないで。私の相手は彼だけだから」

「……うっかりでごめんね。大切だったもんね」

「うん、大切だったわ。でも、異世界に行ったらいるんじゃないかって考えたら、貴女を褒めたくなるわ」

「そうだよねえ！ うん！ じゃあ、一緒に帰ろっか」

「行きましょ」

そして私と妹は学校の上からスロープを下っていき、ゆっくりとその会話に興じながら恋バナに花を咲かせた。